

## かなであん



249-0002 神奈川県逗子市山の根1-7-24 Tel: 046-871-1863 Fax: 046-872-3485

© HPのアドレスが、<http://kanadean.net> になりました。

## 今 できることをやる

平成24年度も残り僅かとなりました。皆さまにはどのような一年だったでしょうか。

思ってもみなかった悲しい別れを経験した方、ケガや病気にみまわれた方、家族が倒れ介護と心痛の日々にある方もおられるでしょう。もちろん、人生は悲しく苦しいことばかりではなく、嬉しいこと、喜ばしいこともあります。しかし、善いこと悪いこと、そのいずれもが自分の思うようにならないことに変わりはありません。

そして、新年を迎えるということも、めでたくもあり、皆が等しくひとつ年齢を重ねることであります。

\* \* \*

医学用語に「退行性変化」という言葉があるそうです。字のとおり、さまざまな箇所が徐々に、本来ある力、能力を失っていく過程をいうそうです。

たとえばジャンプ力は、若いときには1メートルくらい簡単に飛べたのが、40を過ぎると難しくなり、50になると不可能になります。人間のみならず、色々な動物もみな、この退行性変化は避け

られませんが、人間はもっとも、この退行性変化が長い生きものだからです。最初にこの変化に気づくのは、25歳くらいからですから、平均寿命からすると60年以上も、この変化のなかで生きて行かなければなりません。こう考えると、人間には、退行性変化におちいってからの生き方が、大変重要なことがわかってきます。現実にこの退行化を、肉体だけでなく知的な部分にも実感して、いかにも残念であり情けなく思う時があります。しかし、こうした摂理のおかげで世代交代も自然におこなわれていくことを思えば必要な変化です。

\* \* \*

一般には、年齢を重ねるとともに、基礎体力はもちろん、知的能力も確実に落ちていき、家族に指摘されたりすると、生活行動に消極的になってしまったり、これでは肉体的にも知的にも、若い者に勝てるわけがないと思ったりしますが、まわりを見ると、自分より高齢でも、同じような年齢でも、年齢のわりに悠々というか、堂々と生きておられる人が多いのに気づかされます。

これは、対人力というか、接触力というか、要するに、歩んできた人生の中で確実に身につけてきた、生きる智慧が衰えを補っているからにちがいません。何よりも、この種の力は、年齢と共に

身につけた生きるという根本の力（智慧）ですから、その人にねばり強く残っていて、簡単には失われられません。歳をとったらそういう力を大切にしたいものです。時には押しつけがましいこともあるでしょうから、嫌われないように気をつける余裕をもつのも年の功、対人力の大切なところかもしれません。

\* \* \*

現代人は、知識に頼り、頭であれこれ考えがちですが、かえってそれが行動にブレーキをかけてしまっていることが多いのです。よい結果を求め過ぎるあまり、行動せず頭の中で堂々巡りを繰り返すのは健全な心身とはいえません。

どう生きたらわからないと悩む時には、とりあえず今できることをやってみましょう。モタモタしながらの自分のためだけであっていいのです。それがまわりの人の役にたっています。モタモタするところを見せないでおこう、若く見せよう、新しい機械を使いこなして見せよう、ましてや大仰なことをしようと思はなくていいのだと思います。いただいた命の時間をどう生きるのか。それは、やはり一日一日を大切にして、自分の役割を、今できることで果たしていこうとすることだと思えます。これは私自身に言い聞かせていることでもあります。来年も宜しくお願い申し上げます。 合掌

ご案内  
奏庵年末法座

日時  
12月26日(水)  
午前11時より

「真宗宗歌」  
正信偈  
法話  
御文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

今年も残り僅かとなりました。寒い日、暑い日、雨の日、風の日、時には膝や腰の痛みを労りながら、毎月、百段近い階段を上ってお参り下さいました皆さまとともに、和やかに、無事に、ご法座を勤めさせていただきましたことができ、ありがたく、心より御礼申し上げます。

本年最後のご法座です。年の瀬と新年の一ヶ月が普段と何ら変わるわけではありませんが、このけじめが日本人なのでしょう。

何かと気忙しい時期ですが、どうぞお参り下さい。



平成25年度年回表

1周忌	平成24年
3回忌	平成23年
7回忌	平成19年
13回忌	平成13年
17回忌	平成9年
23回忌	平成3年
25回忌	平成元年
27回忌	昭和62年
33回忌	昭和56年
50回忌	昭和39年
100回忌	大正3年

法事とは「仏法の行事」のことをいいます。この仏法はほかでもない”残された、今生かされている私たちのため”のもので、す。亡き人(仏さま)をご縁として、遺されたものが集い、和やかに仏法にふれている、自分が亡くなったあとも、自分を縁として子供や孫が仲良く集っている姿、想像するだけでも、うれしく、これほどありがたいものはありません。

法事は、何をおいても年月を守らなければならないものではありません。もちろん、人数やご馳走も、多くなれば仏さまにわざわざすることなどありません。仏事として伝えられてきた年回表をもとに、ご家族が集える日を選びお寺にご相談下さい。

何のために

生きているのだろう。

何を喜びと

したらよいのだろう。

これから

どうなるのだろう。

その時私の横にあなたが一枝の花を置いてくれた。力をぬいて重みのままに咲いている。

美しい花だった。

星野富弘

編集後記

長距離移動の時間つぶしに手にした月刊誌に、「時代劇が廃れた本当の理由」という時代劇研究家の稿があった。■役者、監督、脚本家、プロデューサー。それぞれが手前勝手な事情に右往左往している間に、彼らの意識からは観客さえ消えてしまった。そして誰もいなくなったとある。選挙戦のさなかでもあり、あらゆるものが廃れるときの症状に当てはまると思いつつ読んでいた。■まずミスキャストを挙げている。新鮮さや改革を打ち出そうとするものだと大目に見たとしても、稚拙さが痛々しいほどの人寄せ的な配役では、あまりに観るものを無視している。よしんば、企画が安易であったとしても監督や俳優に力があれば、よいものが生み出せるはずだが、担ぐ人も、担がれる人も、本分への自覚がなく、目指すべき道に真剣に取り組む意識がないというしかない者が多くなっているからだというのだ。■最も聞かれる嘆きは、「いい脚本がなくなったからだ」という。これも何事にも言えることだ。政治も経済もモノ作りも、そして人生も、思うようにはならないとしても、志の高い、いい脚本を描いて進むことが大切だ。それも頑なで融通が利かないものでは発展性がなくなる。時代劇ならエンターテインメント性が必要なように、政治にも人生にも柔軟性と色気はあった方がよい。■存続させるには一過性流行では困る。特に政治はそうだ。なのに、いつの頃からか、同じ次元で政治家も選ばされるようになり、気が付けば、疲弊し、魅力ある政治家は誰もいなくなっていた。それが今回の選挙結果ではないだろうか。■また、時代劇がダメになったのは「セリフで何もかもを説明させる」が大きいという。そのセリフも胸をうつようなものでもなく、ダラダラと言いつつ訳がましく、演技力を低下させ、ドラマを白けさせ、時代劇離れになってしまっているのだという。技量の低い者が言えば言うほど、底の浅さ、志の無さが見え、満たされず、幻滅する。正しく我々が政治に抱いている感情だ。新しい(?)政権には、これ以上国民を萎えさせる虚しさを味合わされないことを願わずにはおれない。Norimaru